

○ 小説家 永代美知代

妊娠中已に非常な重大な覺悟は待ちますけれど、何と云つても、まだ、ハッキリした意識のないのは當然ですが、お産をして、ふんばり、やんばりしたものが脚のあたりにうごめいてゐると感じた其時、「まあどうしてお産婆さんは早くあの人をよくして呉れないのかしら、いつまでもあのまゝにして置いて風邪でもひかせたら如何するつもりだらう」と先づ第一に赤ん坊の健康を氣づかふのは殆んど本能的の愛情でせうか、そして乳房をふくませるにつけ、だつこするにつけ、自分は餘程大した責任を持った、エライ人の様な心地がしてウツカリしてはゐられない氣がしました。